

論文要旨

李白樂府歌行論

乾
源
俊

李白像の構造と生成過程について考察する。素材は、(一) 文集序、(二) 詩作品、(三) 呼称をめぐるエピソード、である。

(一) 李陽冰「草堂集序」には、李白の経歴が、玄宗皇帝との親しいやりとりの場面を中心に、出自が唐朝の書き方に、出生が老子出生譚に比せられつつ、描かれる。臨終の床で語る、かくありたかった、人生についての思いと、いま踏みこみつがある聖なる世界への展望が反映するためである。

文集序の詩人像は、詩作品を一定の方向に読むように仕向けている。これに導かれて詩作品を読むと、どのような仕方がよいか。「歌行」には自己を形象化した詩人像があらわれる。その形成・展開の過程を追い、文集序の詩人像と比べる。

(二) 李白文学の主要な部分が「楽府・歌行」の歌辞制作にある。「楽府」が既存の楽府題及び先行作品によって形成された作品世界を踏まえつつ制作されるのに対し、「歌行」は自身を作中に登場させるような仕方で行われる。詩人像の形成過程を見るのによい。

「楽府」については、代表作「蜀道難」を例に読解史を整理。制作意図について従来議論が紛糾してきたのは、文学遺産をめぐる脱構築的な詩人の態度が、過去の文学伝統へと向かう読み手の意識と齟齬をきたすためである。これが送別の作であることにより、送別の歌行と比較検討が可能となる。

「歌行」は、都市の消長を描く初唐七言歌行の叙情を承けた作と、武后期の詠物歌行を承けた、山に還る友人を見送る作がおおきな類をなし、前者がおもに開元年間、後者がおもに天宝年間と、宮廷に招かれた前後に、

制作年代が分かれる。それぞれにどのような詩人像があらわれるか。前者には、人生短促を嘆く「古詩十九首」以来の叙情形式が踏まえられ、水の表現をめぐって一瞬なかに永遠を見る、詩的認識が示される。「将進酒」に至って、飲酒と蕩尽のうちに、人間存在の有限性を超克する李白像が立ち上がる。後者には、山に還る友人の姿が、力動的な山岳描写とともに映出され、「鳴皋歌送岑徵君」に至って、宮廷を追われた自己の姿の反映、憤懣の吐露が見られる。「夢遊天姥吟留別」では、さらに進展して、夢中における登山、神仙との接触、失敗の過程が描かれるが、宮廷への出仕と放逐に関係づけて読むことが可能である。

送別の歌行に見送られる相手、それを介して見えてくる自身の像。李陽冰序に映し出される自己像。これらが重なり合うのは、ともに隠逸挙人の人物類型に従っているからだ。李白は天宝元年の「高道」科、岑徵君は天宝三、四載の「高蹈不仕」科に応じただろう。「高道」科は、近年その存在が指摘された。

開元末から天宝初にかけて、玄宗皇帝の老子夢見と形像発見、玄元廟と崇玄学の設置、「明四子」挙（道挙）の実施、玄元皇帝降見の報告、老子への尊号授与など、玄宗の老子信仰から生じた道教尊崇の施策が続く。「明四子」挙が崇玄学の生徒を対象に老莊文列四子の知識を問うのに対し、「高道」「高蹈不仕」両隠逸挙は、「道」の義を体現する人物を対象としたものと思われる。

霊応は続き、天宝四載には玄宗自身が大同殿で天声を聞く。太清宮道士・蕭從一が玄元皇帝のメッセージを受け取り、玄宗が玄元皇帝の傍らに控えるべく準備が整っているという。これは玄元皇帝廟で玄宗の像を玄元聖容に隣して建てたのと照応する。「夢遊天姥吟留別」における神仙との交信失敗は、ちょうど蕭從一報告の陰

画をなす。時代の無意識を映したものだ。

離京直後の複雑な思いを経て、十数年後、玄宗の訃報に接した李白は、自身も篤い病の床で玄宗との思い出を、神との交流を紐帯とした聖なる御代という、王朝のイデオロギーとともに呼び起こした。経歴が唐朝と老子に関係づけられるのはそのためである。

(三) 賀知章に与えられた「謫仙」の呼称を、李白本人が好んで自称する。その理由は、皇帝の靈応に沸く首都の雰囲気を背景として、目に見えぬ神仙世界の価値が、その呼称によって得られたことに拠る。おそらく彼の風貌に纏われた、先祖が西域へ流謫された表徴が、賀知章によって瞬時に価値へと転じられたことに拠るだろう。

時空を超える主体としての詩人像は、酒中に突如として立ち上がる李白像から、玄宗朝の標榜した永遠なる御代、それに関係づけた自己像へと進展する。ひとつの指向性に貫かれていると見ることができ、発想の拠って来る文化的・宗教的淵源についてはさらに考察する必要がある。

論文審査結果の要旨及び担当者

提 出 者	乾 源俊
論文審査担当者	(主査) 教授 佐竹 保子 教授 三浦 秀一 准教授 土屋 育子
論 文 名	李白楽府歌行論
<p>本論文は、序論2章、本論7章（楽府論3章・歌行論3章・伝記論1章）、結論1章から成る。序論第一章「李白文集序の詩人像」は、最古の李白集序文2篇を考察する。同第二章「楽府と歌行」は、文学ジャンルとしての「楽府」と「歌行」の定義を定め、李白の作品群を類別する。</p> <p>本論第一章「「蜀道難」本事考」は、「蜀道難」の歴代解釈を辿り、「蜀道難」は、その暗示性によって読者に自身の読みを展開させ、開かれた物語行為に加担させる、特異なディスクールを拓く、とする。</p> <p>第二章「「蜀道難」論に寄せて」は、六朝初唐の同題楽府や、蜀（四川省）をめぐる先行諸文献に比して、李白「蜀道難」は、持続する文学的記憶としての四川像を内部から崩壊に導き、文学的記憶を利用しつつそれを消滅させる装置となっていることを、精緻な読解によって示す。</p> <p>第三章「謫仙人と呼ばれた李白」は、「蜀道難」を契機に李白が「謫仙人」と称された逸話群が、人物鑑定をめぐる既存の物語の型に拠ることを指摘し、作者を作品内に見る必要性を述べる。</p> <p>第四章「初唐七言歌行と李白」は、李白の七言歌行を、都市を描く初唐の長篇を受け継ぐ群と、山居に帰る友人を送る反都市的な送別歌行群に分けた上で、前者を分析し、先行作品にある都市消滅の夢想を超えて、「現在」を充満させる企図を指摘する。</p> <p>第五章「生成する李白像」は、前章同様に都市を描く作品群を対象に、第三章に述べた、作品に内在する李白像を凝視する。古人と「私」が対峙する均質な条件としての「水」辺で、詩人は再び見出される時間に慰撫され、さらに「襄陽歌」「将進酒」に至って、不滅の偶像「李白」へと変貌する。</p> <p>第六章「送別歌行の形成と展開」は、山居に帰る友人への送別歌行を取りあげる。李白の送別歌行は、彼の宮廷への出仕（742年）と放逐（744年）直後に集中しており、これには唐王朝の道教政策と科挙政策が関わる、とする。老子を始祖とする唐王朝は、玄宗皇帝（在位712～756）が老子を見た等、数々の靈異の記録を持つ。その老子の道の体現者として、科挙政策の一環である隠者推挙が行われ、李白は隠逸挙人として王朝の聖性具現を演出する役割を振られていた、とみる。李白の送別歌行群が、出仕中・放逐直後・十数年後と、変化するさまを辿る。</p> <p>第七章「李白登科考」は、李白の隠逸挙人としての出仕を、多くの文献によって跡づける。</p> <p>結論では、以上9章がまとめられる。楽府・歌行いずれにおいても、前代の遺産を豊かに受け継ぎそれらを超えながら、とくに歌行で「唐王朝のイデオロギーに身を染めた自己像」が開示され、それがいかに変化し、後世いかなる詩人像として定着するか、その跡を克明に辿っており、作品の読みは精緻である。李白研究に新たな可能性を拓き、斯学の発展に寄与している。</p> <p>よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。</p>	